

片山廣子の短歌 『いさゝ川』から『心の花』へ——初期歌風の形成を巡って——

文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程2年 清水麻利子

要旨

片山廣子は第一歌集『翡翠』に、『いさゝ川』『心の花』などに発表していた明治四十一年以前の短歌を載せていない。ここまでの歌の特色は、嘆きを詠んだ歌や恋歌であり、何かに囚われた思いが強い。

明治四十二年以降、大正五年発行の『翡翠』までは、写生の歌とともに、比喩的、空想的な歌を多く詠むようになる。この嗜好が、一方で、アイルランド文学の翻訳へと進ませたのではないだろうか。真摯に自己と向き合う『翡翠』の歌風は、美しい詩歌の境からも、囚われる自我からも離れ、独自の内面世界を模索することによって確立する。

本論では、そこに至る、『翡翠』以前の初期歌風の形成を巡って考察した。

キーワード

片山廣子 佐佐木信綱 短歌 『いさゝ川』と『心の花』 われ

目次

はじめに

一、片山廣子の佐佐木信綱への入門

二、歌誌『いさゝ川』における歌の出版

三、歌誌『心の花』における初期歌風の形成

おわりに

はじめに

片山廣子の歌人としての歩みと、歌壇の展開の中での短歌の特質を明らかにするために、考察を進めている。修士論文「芥川龍之介・片山廣子の短歌——「越びと」をめぐる、うたの道行——」にまとめた、佐佐木信綱記念館（三重県鈴鹿市）の資料（信綱宛書簡と歌稿）からは、長きにわたる信綱との師弟関係が、廣子の歌も夢をも育てて

いたことが推し量られた。また、「片山廣子の短歌―東洋英和女学院への寄贈本から見えてくるもの―」（二〇一四年度東洋大学大学院紀要第五十一集）にまとめたように、多くの蔵書からは、廣子の短歌世界を形作ったものが見えてくると考えられる。

廣子は、後にイギリス総領事となる外交官を父に持つ。東洋英和女学校に学び、西洋的で自由な気風の教育を受け、「とらわれぬ我」でありたいと願い続ける。若い頃の歌は、夢想的な思索の歌である。「清新といふことが詩歌の精神である」とした佐佐木信綱は、廣子の歌を「清新」と評し、短歌を詠み続けるように励ます。特色ある大正歌壇の中で、第一歌集『翡翠』（大正五年三月）からは、「よるこびかのぞみか我にふと来る翡翠の羽のかろき羽ばたき」など、自我と対峙し、囚われず偽ることなき自分の歌を詠んだ歌人としての姿勢が見えてくる。本論では、『翡翠』に載せていない、『いさ、川』（明治二十九年十月創刊）から『心の花』（明治三十一年二月創刊）の明治四十一年掲載までの短歌に着目して、初期歌風の形成を辿りたいと思う。『翡翠』の清新さに繋がる、自己の内面である「われ」をうたう歌風の確立過程を明らかにすることで、片山廣子の短歌を、近代短歌の流れの中で位置付けることができると考えるからである。

一、片山廣子の佐佐木信綱への入門

片山廣子（旧姓、吉田廣子）は、東洋英和女学校を卒業後、明治

二十九年十八歳の折、友人の新見かよ子と共に、佐佐木信綱を訪ねた。そして、短歌と源氏物語の講義を受けるようになる。この頃、樋口一葉の小説が評判になり、一葉の歌の師は中島歌子であった。廣子は、十月に『いさ、川』を創刊し注目を集めていた、二十五歳の若い信綱の方を選ぶ。同誌に十九歳で初めて短歌を発表。三十一年二月に『心の華』（後の『心の花』）が創刊。三十二年に「竹柏会」結成。『心の花』の創設期に関わり、師弟の強い絆が結ばれたことであろう。以後、長きに亘り厚い交流が続く。

信綱が書いている『翡翠』の序文（1）によると、「竹柏会」の合同歌集『あけぼの』『玉琴』の初期の歌をも載せるように言々と、廣子は

自分の歌は、たくみを捨てて、事物をありのままに感じたものでありたい。そして其感じを普通の人と共に分かつものである。其ためには、美しい狭い詩歌の境を未練気なく離れなければならぬ。これが自分の近頃切に感じてゐる点である。

といい、旧衣であるこれまでの歌を、載せようとはしなかったそうである。それに代わるべき新しい衣が、「われ」であったと言えないであろうか。なぜなら、廣子は続けて、

併しながら、この翡翠の歌の中には、現在のこの見地を目標と

して見れば、捨てなければならぬものも沢山ある。それを捨てなかつたのは、たとへ多少のたくみの交つた作であつても、狂熱と理智の濃き陰影を印して居る点に於いて、最も強く自分を現はしたもので、自分の身の半身の如くなつかしく思はれたからである。覚めんとして覚め得ざる心の姿、真面目なる女の内的生活の記録の一片、新しき道にいつる記念

としての『翡翠』だと述べている。これに対して信綱は、次のように記している。

思ふに著者の歌は、今や岐路に立つてゐる。旧衣を破り捨てて、それに代るべき新しい衣が未だ成つてをらぬという状態にある。固より旧衣は如何に美しとも、それにまさつた新衣だに得なば破り捨てても決して惜しむに足りない。著者の態度は、旧い自己にあきたらないで、而も未だ新たな信念にそふ歌を得むとして得かねてゐると思はれる。而して著者がその歌風のかかる岐路に立つて、その現在をありのままに曝露しようとした勇氣は、また多とすべきである。而して自分の著者に待つところは、その将来の大成にある。自分が著者を知つてゐるものも、自分に若くものはあるまいと思ふ。

と結んでいる。廣子が旧衣、つまり「美しい狭い詩歌の境」を離れ、

「強く自分を現は」した「われ」の歌を獲得する途上としての岐路に立つていることを信綱は示唆し、自分を知るのは「自分に若くものはあるまい」と、「おのがじしに」の廣子の歌の大成を期待しているのである。

二、歌誌『いさゝ川』における歌の出發

『いさゝ川』は、明治二十九年十月に創刊された。この年、二十五歳の信綱は雪子と結婚をする。五年前の六月、父の弘綱は不歸の人となっている。二十七年九月には母の光子が逝く。信綱はこれまでに『日本歌学全書』（二十三年）『歌の葉』『校註徒然草』『標註十六夜日記読本』（二十五年）等を發刊。二十九年には、鷗外の「めざまし草」に歌を寄せている。同年五月の「めざまし草」に「笛」の連作がある。（2）（山の端に月はのほりぬわが笛を今こそ吹かめ月はのほりぬ）（人は世はわれを捨てたりしかはあれどわれに笛ありこの笛あるを）（われは唯ひとりぞ吹かんわれ知らぬ人にきかせむ敢へてとどめむ）（わが身をも世をも忘れて吹く笛のすみゆくまにすむ心かな）等の歌を詠む。ここでの「笛」とは短歌の比喻であらう。日本の古典と和歌を伝授してくれた父の志を継ぎ、若い信綱は心細いながらも、歌誌『いさゝ川』を創刊するに至る意気込みを感じさせる一連の歌である。

『佐佐木信綱研究』第四号に、田中薫「無名氏」作として発表した信綱の新体詩」（3）の評論が載る。

明治二〇年から三一年まで徳富蘇峰によって発行された総合誌「国民之友」には、「無名氏」という覆面作者の新体詩がかなりある。二五年から二九年までの五年間でも二〇数篇。その多くが、現在判読中の明治二五・二六年の信綱自筆創作ノート『小鈴詠草』（日本近代文学館蔵で、未翻字）の作品と合致することが分かった。（中略）「国民之友」の文芸欄は当時、坪内逍遙、山田美妙、森鷗外、幸田露伴といった文学者の作品を次々に掲載して人気を博し、多くの読者を獲得していた。若き穎才として名声を高めつつあったとはいえ、満二十歳の信綱にとつて、同誌への自作掲載、殊に歌ではない、初（と思われる）の詩の掲載には、それなりの感懐があつたのではないか。

このように早くから、新体詩に興味を持っていたことが分かる。この後、『いさ、川』と『心の花』に多くの新体詩を載せるところとなる。明治二十九年創刊の『新聲』二巻六号（4）にも、新体詩「玉くしげ」へ世に捨てられて世を捨てて／み山の奥にこしかども／やぶれはてたる吾胸は／慰さむべくもおもほえず（略）を寄稿している。

与謝野鉄幹、落合直文とは既に親交があり、浅香社の尾上柴舟、金子薫園とは二十九年春に知り合っている。『いさ、川』と『心の花』が、若い主宰者の信綱にも関わらず、旧派和歌から新派和歌までの第一線の歌人や文学者、研究者が寄稿しているのは、幅広い交

友と信頼があつてのことであつたろう。『いさ、川』創刊について、『佐佐木信綱作歌八十二年』（2）に、「十月 歌誌、「いさ、川」を創刊した。当時住んでおった小川町の名に因んだのであった。鷗外氏は鍾礼舎主人の号のもとに、短歌は五行にかくべしとの説を、学海翁は題詠不可論を寄せられた。」との記述がある。廣子が信綱を初めて訪れたのは、この年の暮れのことである。

廣子は、『いさ、川』（第一号から第七号まで）に、短歌四首と散文一編を掲載されている。短歌は第三号に初めて載り、この号の無記名の詠草一首が、第四号に「廣子」と記載され、全歌集未収歌を発見するところとなった。この歌は、題詠でありながらも、生活の心情を吐露した「われ」の歌であることが興味深い。また、第六号には、初めて投稿した散文が載っている。信綱が廣子の文章力に、早くから気付いていたことが分かる。ここでは、廣子の作品掲載のないものも含め、全号を紹介しておきたい。

『いさ、川』第一号

明治二十九年十月五日発行（五日定刊）竹柏社発行

巻頭和歌さざれなみ―東久世通禧、高崎正風、黒田清綱、税所敦子など

霧はる、沖の小じまの松のうへにひかりは消えてのこる月かな
（高崎正風）

年を経ていよ／＼こひし今の世にまさばと思ふことのみにし

て (黒田清綱)

みめぐみのふかきを民にくまするや縣の井戸のこゝろなるら
む (税所敦子)

巻頭詩藻かり船―「春のあした」(新体詩) 大塚楠緒子

春のあしたをたちこむる／霞みのとばかりかきわけて／あやに
かゝやく雲ふみて／美を司りませる神はいま／明ゆく野べを
見おろしぬ (略)

巻頭文玉がしは―「そぞろ言」鍾禮舎主人(森鷗外)

散文の句読は文法上より切る習なれば、その意義の断続とこ
とごとく吻合するものなれども、韻語のに至りては詩律上より
も切らるべく、文法上よりも切らるべくして、この二種の句読
は一致することあり、また相牽くことあるは人の知るところな
り。(略)

百五名出詠。金子薫園、石樽千亦、佐々木雪子など

巻頭和歌には、高崎正風、黒田清綱、税所敦子など、旧派和歌の
歌人達が作品を寄せ、『いさ、川』の第一号を祝福するいずれも旧
派和歌の格調高い風韻のある歌である。

税所敦子は明治維新の後、明治三十三年まで宮中女官として和歌
の指導にあたっていた。山田吉郎『明治短歌の河畔にて』(5)に
は、「旧派和歌の正統的位置にある女流歌人であり、当然のことな
がら歌柄のとなつた題詠が中心をなしているが、(略)その作品

には意外にしなやかな感性がうかがわれる。」とあり、「いでておふ
人しなければ里中に螢とぶなりさみだれのそら」を挙げてある。豊
かな情感の中に、やや理が勝っているところは、廣子の歌に通うと
ころがある。税所敦子は『いさ、川』に歌ばかりでなく、第六号と
第七号に「心づくし(上)・(下)」(目次は「心つくし」とあるが本
文の表記に従った)として、歌を織り込んだ自伝的散文を寄せてい
る。〈よの中のおも荷になづむ心には野がひの牛もうらやまれつ、〉
題詠が中心の宮中歌人であっても、晴れでなく曇を詠む時には、こ
のような歌もあったのである。

信綱は、明治十九年十五歳の頃には父の弘綱に代わり、鈴木重嶺
や中島歌子らの歌会に出席しており、樋口一葉とも交流がある。明
治二十二年十八歳の二月、高崎正風から御歌所へ入るように勧めら
れ、近眼視の悪化のため、断ったという。若年ながらも信頼を集め、
若いからこそ、年長者の旧派和歌を『いさ、川』の巻頭に置いたの
であろう。

一方で、巻頭詩に「春のあした」(新体詩) 大塚楠緒子を掲載す
る。信綱が新体詩を多く発表していることは既に述べたが、翌年に
島崎藤村が『若菜集』を刊行するように、新体詩は新時代に受け容
れられている。しかし、そればかりでない。二十一年九月、父の弘
綱は雑誌『筆の花』に「長歌改良論」を発表。万葉時代の五七調か
ら平安時代の七五調へと移行したことを受け、七五調の長篇を作る
べきと主張し、旧派の人々に非難されていたという。父を擁護し、

「新体詩」の新しい表現形式で、長篇詩の弘布を心掛けたと考えられる。

巻頭文「そぞろ言」の鍾禮舎主人（森鷗外）は、和歌には韻律が最も大切だと力説する。

第一号には百五名もの出詠があり、今後編集面で『心の花』を支える、石樽千亦の名が見える。吉田廣子は第三号からの出詠となる。

『いさ、川』第二号

明治二十九年十一月三十日発行

巻頭和歌さざれなみ―落合直文、与謝野鉄幹、小金井喜美子、大塚楠緒子など

近江の海夕霧ふかしかりがねのきこゆる方やかた、なるらむ

（落合直文）

さと川のひととやなぎかげやせて霧にしめれるありあけの月

（与謝野鉄幹）

機織女がはたおりはて、つくくくと見あぐる空を雁帰るなり

（佐佐木信綱）

何となき物のひゞきもめし給ふみ声かとのみあやまたれつ、

（小金井喜美子）

巻頭詩藻かり船―「鹿の骨」（新体詩）安藤直方

巻頭文玉がしは―「題詠を廃す可き事を論ず」依田百川

（学海）

奥付記載歌 ゆきく／＼て海とはならむいさ、川人にしられぬな
がれなれども

奥付の「ゆきく／＼て海とはならむいさ、川」の一首からも、信綱が万葉集をはじめ日本古典文学の研究者として多忙な日々の中で、歌誌の創刊にかける期待の大きさが伝わる。

第二号の巻頭和歌は、旧派和歌が中心であった第一号と大きく異なる。落合直文、与謝野鉄幹、小金井喜美子、大塚楠緒子らの若手の作品を掲載し、歌誌として進むべき進路を、信綱は大きくここで舵取りしたのである。歌はまだ題詠の古めかしさがあり、「湖上霧」（直文）「秋暁」（鉄幹）など、各々題を付す。信綱の「機織女」の歌は、「足利にものしけるとき」の題で、絹織物の産地の足利への旅を伝説を重ね空想的に詠む。「はたおりはて、つくく／＼」に、作者の穏やかな人柄を感じさせる。小金井喜美子は「父の身まがりける頃」とあり、父親の逝去の状況が、その後の喪失感とともに伝わってくる。

ここに、依田百川が題詠について意見を述べている。「凡そ心に思ふ事。目に見る事を。ありのまゝに述べればこそ。其事実明らか。其心もよく知らるれ。さるを題をおきてよみ出づるからに。己が心はそらになりて。唯おもしろく珍らかによみ出むとして。己が心にもあらぬ事をよみ出るなり。」ありのままに気持ちを詠もうとすれば、題詠は不自由なものであるとの主張である。

鉄幹は明治三十三年四月から、新詩社の機関誌『明星』を中心に、

浪漫的歌風の新派和歌の旗頭となつてゆく。「新詩社清規」に、自我独創の詩を楽しみ、師弟の関係をなくすことを掲げる一方で、桂園派の古典の模倣を継承し、「丈夫風」の歌を詠む。信綱の方は師弟関係は強固なままで、「おのがじしに」の個性を尊重し、『いさ、川』から『心の花』へ少しずつ、題詠からの歌の改革を推し進めていくのである。

『いさ、川』 第三号

明治三十年三月十八日発行

巻頭文 玉がしは――「いさ、川に寄す」 東久世通禧他

巻頭和歌 さざれなみ――東久世通禧、高崎正風、黒田清綱、落合直文など

巻頭詩 藻かり船――「惆悵」（新体詩・七五調三十六句）与謝野鉄幹

36頁 吉田廣子（田家梅） 賤が屋は春の夜ごろぞおもしろきひまもる風も梅が香のして
41頁（惜歳暮） 四十八 いたづらになす事もなく世にふればいよ／＼惜き年の暮哉

前年の暮れに入門した廣子の、早くも初の掲載歌となったのが（田家梅）題詠の「賤が屋は」である。侘しい情景の中に「梅が香」の艶やかな風情があり、古典歌の模倣かと思わせる、優等生的な一

首。「賤が屋（下賤の者の家、農家や漁師などの家）は、春の夜のうちに興趣が感じられる。隙間を洩れてくる風も梅の香りがするから」と詠む。古典歌を繙くと、『風雅集』所収の足利尊氏の詠歌に、〈軒の梅は手枕ちかく匂ふなり窓のひまもる夜はの嵐に〉があり、心を詠むことを重んじた京極派の清新な叙景歌といえる。廣子の母は二条派の和歌を嗜んでいる。題詠に臨み、古歌に影響を受けることもあったであろう。

〈賤が屋は春の夜ごろぞおもしろきひまもる風も梅が香のして〉の廣子の歌を、次の第四号で、鈴木展太郎（山家梅）〈山ざとのしづが垣根の梅のはなをる人なくてちりにけるかな〉と並べ、大橋文之が歌評している。（十七頁から十八頁）「展太郎ぬしの山里の歌。廣子ぬしの賤が屋はの歌。前なるは、桜ともなりぬべく、後なるは、賤が屋にも限るべからず、題に梅といひ、田家とあれば、しか詠まれしものならめど、前の三句、梅の花を桜の花とし、折る人を見る人として、花の題に改め、後なる題の、田家とあるを削られなば、好き一对の歌ならむかし。」題詠の題を変えればとまで言うのは、題詠そのものの限界を感じさせる歌評となった。

『いさ、川』 第四号

明治三十年四月十二日発行

48頁 吉田廣子（名所の花） わたし守ふねこぎとめて眺むめり角
田のかはのはなの夕ぐれ

60頁廣子―四十八 いたづらになす事もなく世にふればいよ
く惜き年の暮哉

掲載二回目の、(名所の花) 題詠「わたし守」の歌は、二つの視
点が特徴となっている。「わたし守が舟を泊め、一息ついて桜を眺
めているらしい。隅田川の花見の先ほどの賑わいの後、どこと
なく桜に風情のある夕ぐれ時であることよ」いつしか、作者の視点
はわたし守の目に重なってゆく。昼間の盛りの花ではなく、夕ぐれ
の隅田川の桜を詠んだ風趣により、信綱に採られたと思われる。

〈いたづらになす事もなく世にふればいよく惜き年の暮哉〉は、
(惜歳暮) の題詠で、前の号に無記名で載っている詠草である。互
選詠草であり、一名が採っている。この号に「廣子」とあるので、
吉田廣子の歌であろう。これまでのように型にはまったところはな
く、率直に内面の思いを詠んだ自分の歌になっている。そして、こ
の一首が廣子が図らずも、個の自覚としての「われ」を詠んだ最初
の歌である。(惜歳暮) という題詠が、そうさせたと言えるのかも
しれない。

(惜歳暮) の題詠で、五名以上が採った歌。(果もなき学の道をた
どる身はいよいよ惜きとしのくれかな) 〈いく夜ねば春は来なんと
指をりて母にとひつる事も有しを〉 〈くれゆくを惜まざりしはこん
年を嬉しとまちし昔なりけり〉どれも分かりやすく共感を得やすい
歌である。「こんなを嬉しとまちし」三首目の歌と比べると、「いた

づらになす事もなく」と嘆息する廣子の歌は、十九歳とは思えない
内省的な歌いぶりである。自己の内面と向き合う姿勢が芽生えてき
た。広く学問を修め、何事かを為したくも為しえない焦りの思いで
あったろう。(過しつる月日おもはでみな人のあやなく年を惜むけ
ふかな) の歌を廣子一人が採っているのは、「いたづらになす事も
なく」という同様の思いからか。

信綱が評をしている。「大方は似たる趣なる中に、一二番やこの
中の秀逸ならむ。二七番の上句、誰も思ひよりぬべきさまながら、
ふといひいだがたきを、よくいひまはされたり。五十番は、をのか
さなりたるため、一首の調くだけたり。」一二番は〈くれてゆく年
の別ぞをしまる、柳をむすぶかどでならねば〉二七番は〈春をまつ
事のしげきにまぎれても猶をしまる、年の暮かな〉五十番は〈くれ
ゆくを〉の歌である。

風韻と調べを重んじた信綱らしい歌評である。

『いさ、川』第五号

明治三十年五月二十六日発行

55頁吉田廣子(春の歌の中に)

やつ橋のむかしもかくや匂ひけんあはれもふかき杜若かな

同じ題の中には、桜、梅、藤といった春を代表する花々の叙景歌
が多い。廣子が『伊勢物語』の杜若を詠んでいるのが个性的である。

出詠した四月には、まだ杜若は咲かぬであろうから、師の信綱の歌にもあるように、短歌に古典を導き、空想で詠んだのであろうか。

この号に、題詠互選歌の廣子が採っている歌がある。(新年)〈ふじのねのみ雪はこぞの儘ながら新まりても見ゆるけさ哉〉(庭上松)〈春秋の花も紅葉もよそにしていくな世へぬらん庭のおいまつ〉(春月)〈この春はわきてあやなく霞むらんみはしの花にかゝる月影〉の中、一首目は「新まりても見ゆるけさ」、二首目は「よそにしていくな世へぬ」、三首目は「この春はわきてあやなく」とあり、廣子は、他と違う個性的な着眼点の歌に注目している。「みはしの花」は紫宸殿の左近の桜の異称である。三首はどれも風流で格調高い世界ではあるが、題詠の歌の窮屈さを禁じ得ない。

題詠の堅苦しさから、自由に表現できる散文を書いてみたいとの思いに駆られたのかもしれない。第三号巻末には、「いさゝ川課題」として四月から十二月までの課題を提示した後に、「課題は賛助員の撰を経て掲載す。課題外の和歌の添削を請はるゝ諸君には規則書を呈送す。」とある。廣子は次の第六号に物語を投稿し、掲載されている。

『いさゝ川』第六号

明治三十年六月二十八日発行

38頁〜41頁吉田廣子「昔物がたり」(目次は「昔物かたり」とあるが本文の表記に従った)

昔物がたり

吉田廣子

*一部を引用。() 内に要旨を示す。

(この世が開け始まった頃、日の御神は、萬の神たちに勝れ、天地を御心一つに治めていらつしやうた。雄々しき御氣性であるが、とても風流を好まれた。下界を御覧になって、大変さびしげなので、空をとぶ鳥をすべて呼び、明日は各々に歌の一手を教えるので残らず集まれと告げられた。)

形さ、やかにおかしげにて、雲雀といふ鳥なりけり。いとと
うまゐりしものかな、志にめでて、我もとも好める歌を教へん
とて、いみじうはなやかなる御聲に、春の歌をうたひ給ふ。い
ととくおぼえにければ、御氣色うるはしくて、此歌きこえん折
にぞ、天地ものどかにならんと宣はす。あまりのうれしさに心
も空になりて、八重立つ雲を上りつ下りつくりかへしうたふに、
萬の鳥ども、目をそばだて、羨み合ひつゝ、我先にとまゐりつ
どふ。神うみ給ふさまもなく、一つ／＼にことなれるを教へ給
へば、皆ほこりにうたひかはして、家路に急ぐ程、こよなう
にぎは、し。

(夜になった。夜の女神は、悲しげに泣く声を聞き、近寄つて御覧になると、梢の茂みにうごめく鳥がいる。訳を聞けば、日の御神に歌を教わりたくとも、御前に出るのが恥かしく、躊躇ううちに日

が暮れてしまったので泣いているのだと話す。」

あはれときこしめして、さらばわれいとよき歌を教へん、日の御神なりともよも知り給はじ、とほのかに歌ひいで給ふに、此世ならぬ御聲、いひしらずあはれなり。くりかへし教へ給ひて、さはこれまでなり、別れんよと、そよ吹く風に白き御衣を靡かせつゝ昇らせ給ふ。あかずうちながむるに、白雲あはれにたなびきて、ありし御かけも見えず。またいつかはと思ふにも堪へ難うこひしくて、かの御かたみの歌を忍びやかにうたへば、我ながら涙も落しつくべく悲し。されば時移り世変りて後も、猶其折の忘れがたきにや、雲雀野山を辞して、百鳥聲ををさむる頃、これは深き山をいでて、月のかげにうたふとぞいひ伝ふるまことにやありけむ。

あたかも、信綱を慕って集う竹柏会の華やかな歌会を思わせる。「うみ給ふさまもなく、一つ／＼にことなれるを教へ給」う日の神のアポロンが信綱。雲雀は、華やかな女流歌人達。月のかげに歌うのは、廣子であろうか。無口で写真嫌いの廣子を、クチナシ夫人と呼んだのは室生犀星である。夜の女神は「くりかへし教へ給ひ」て、「またいつかはと思ふにも堪へ難うこひしくて」月のかげにうたう鳥の「昔物がたり」であった。短歌という自己表現の歓びを知り、尊敬する師や先輩達への憧れと情熱に満ち、さらに、日の下ではな

く月のかげにうたう鳥というのが、いかにも歌壇の中で孤高を保った廣子らしい姿である。

信綱は、『明治大正昭和の人々』（6）の中で、「廣子さんの歌文の道に対する熱心、従つてその進境はめざましかった。」「当時の橘糸重さんや大塚楠緒子さんに続く年配で、同じくその才と人のすぐれてゐるのを認めてゐた自分は、ある日永田町の吉田家を訪うた」と記し、才能が伸びるよう、理解ある人との結婚を話したという。

第六号目次には、信綱の父、弘綱の「後撰集遠鏡（一）」「梨のかた枝抄（下）」の次に、税所敦子の「心つくし（上）」、ひとつ空けて、吉田廣子「昔物がたり」となっている。若干、十九歳の時の初めての投稿である「昔物がたり」は、期待と注目を集めていたことが分かる。廣子は後に、アイルランド文学の翻訳に取り組むようになり、森鷗外・菊池寛らから高い評価を受ける。随筆や童話も多く書く。随筆は晩年、『燈火節』にまとめられ、昭和三十年七月、第三回エッセイスト・クラブ賞が贈られている。

『いさ、川』第七号（最終刊）

明治三十一年一月十一日発行

百人一首、古典和歌集の研究など、古典特集となる。

巻頭歌 さく花のかげをやどしていさ、川なほも千里にながれ
ゆかまし

最終号である。信綱は巻頭に次のように述べる。「かつ二月よりは、心の花と名をあらため、わが竹柏園の社友なる石樽千亦井原義矩の二君、もはら編輯の任にあたり、毎月十一日に発行すべければ、打ちつづき愛読あらむ事を請ふになむ」として、「さく花の」の歌を掲げる。第二号の奥付記載の歌（ゆき／＼て海とはならむいさゝ川人にしられぬながれなれども）（54頁）と呼応させ、意気込みが更に高まっている。先ず、『心の花』の三月から十二月までの文章課題と和歌課題を示している。文章課題が加わったのは、『いさゝ川』に多くの散文が掲載されていた実績からの自負であつたろう。第一号は三十頁余りだった歌誌は、第七号では百頁を超えていた。『心の花』は文芸総合誌としての新たな門出となつた。

三、歌誌『心の花』における初期歌風の形成

『心の花』の歌

『心の花』（創刊より明治三十七年第七巻まで『いさゝ川の華』）竹柏会出版部発行。佐佐木信綱が主宰した短歌雑誌。『いさゝ川』を引き継いだ。

明治三十一年二月から四十一年七月までの、『心の花』に掲載された片山廣子の短歌を見てみよう。『いさゝ川』に引き続き、ここまでの短歌を第一歌集『翡翠』に載せていない。初めに、この間の『心の花』への短歌出詠月と、随筆・詩・翻訳の年間掲載数を纏めるととで、見えてくる点を次に述べることにする。

短歌

随筆・詩・翻訳

明治三十一年—二月、四月、七月、九月 — 随筆十二篇

三十二年 — — 随筆三篇

三十三年 —（この年から片山廣子の名）

— 新体詩四篇、随筆二篇

三十四年—二月（「竹柏園集」第一編）

— 翻訳二篇、随筆五篇、「竹柏園集」随筆十一篇

三十五年—五月（「竹柏園集」第二編）

— 随筆一篇、「竹柏園集」随筆六篇

三十六年 —

三十七年—五月、七月、九月 — 随筆四篇

三十八年—一月、三月、七月

三十九年—一月、四月、五月、六月（「あけぼの」）

九月、十一月、十一月（「玉川集」）

— 「あけぼの」詩四篇、随筆二篇、詩二篇

四十年—一月、三月、六月 — 随筆一篇

四十一年—一月、四月（「玉琴」）、七月

短歌を毎月に出詠していなかったことが分かる。空白の年もある。一方で、散文は熱心に投稿し、明治三十一年には天位を二回受賞している。短歌から幾つかを引用しよう。

明治三十一年二月（雪中驚）『心の花』（第一巻第一号）

春たてとなほふる雪のさむければ花まちかほにうくひすの鳴く

『心の花』廣子初めての掲載歌。題詠としては堅実な詠いぶりである。時代はまだ古いままだが、いつの日か自分らしく生きられる日も来るのではないかと、「花まちかほ」に歌うように読める。

明治三十四年二月「つゆくさ」『竹柏園集第一編』博文館発行。

佐佐木信綱選。『このころの華』の発表短歌と書き下ろし。全歌数八三九首。廣子は短歌一篇十二首、随筆十一篇を掲載。

いかにせん夫が羽織のほころびのめには入れどもぬふ由のなき
おなじくは耳なき人に告げんより石をあつめてわれかたらばや
おさへてもそゝるにうごく心かな岩にもあらず木にもあらぬ身
は

廣子は明治三十二年の二十一歳の時に、大蔵省に勤務し後に日本銀行調査役となる片山貞次郎と結婚した。翌年に長男の達吉が誕生。森鷗外や、後には夏目漱石が暮らした、駒込千駄木町の通称「猫の家」に住んだ。夫の弟妹の面倒を見る立場であり、嫁として日々の生活に追われる苦労があったという。採り上げた歌は、人の世に生きる懊悩を詠む「われ」の歌である。「耳なき人に告げんより石」に語ろうとは、周囲に理解者のいない孤独であり、それでも、「岩

にもあらず木にもあらぬ身は」燃え上がってくる情熱を抑えることが出来ないと嘆く。明らかにこれまでの歌とは変化している。

人の手にとらんとすれば消にけり神のめですつゆのしらたま
風あらく星の光すごしかゝる夜にいかなるつみをたれ犯すらむ

廣子はクリスチャンではないが、東洋英和で学び聖書を読み、キリスト教の影響は大きく受けている。神や星や罪をよく題材にし、与謝野晶子らの浪漫派も、多く詠んだことは知られている。「神のめですつゆのしらたま」がすぐに消えてしまうというのは、捕まえておかないと、浮かんではすぐに消えてしまう歌の言葉ともとれる。晶子は（人の子にかせしは罪かわがかな白きは神になどゆづるべき）など、『みだれ髪』に、明治三十四年六月までの歌を収録し、三九九首中三十九首に「神」が詠まれている。同じ歳の廣子は晶子の歌を意識して読んでいたと思われるが、自分は独自の歌を詠もうという自意識も高かったであろう。

『野に住みて』（月曜社）の解説（7）に、「片山廣子の「境地」として佐佐木幸綱は、

彼女の第一歌集『翡翠』は、近代短歌史のなかできわだった特色をもっている。哲学的な主題を正面からうたった女流歌人は、この歌集以前にはほかにいない。與謝野晶子『みだれ髪』

が早く、社会的な面での日本女性の新しい青春を表現した。『みだれ髪』が社会的なら、『翡翠』は女性の内面的な世界を表現した。このあたりの『翡翠』の短歌史的位置づけをふくめて、廣子の評価はまだ定まっていない。

と述べ、廣子の独自性は、「女性の内面的な世界」を表現するところにあるとする。廣子自身、『翡翠』は「覚めんとして覚め得ざる心の姿、真面目なる女の内的生活の記録の一片」であることを、信綱に語っている。内面的世界としての「われ」を詠うことが、廣子にとって清新な独自の歌の世界であっただろう。

明治三十七年九月「声なき星」『心の花』（第八巻第九号）

わか草の若かりし世の物思ひいづれば胸もゆるかな

『竹柏園集第一編』に歌を収録した後、翌年の三十五年五月、『竹柏園集第二編』に「無題」五首を出詠、次の年は作品がない。三十七年からは、再び出詠している。一方で、散文は三十一年は『心の花』創刊以来毎月投稿、入選して掲載されている。三十四年二月、ミラー「自然の美」の翻訳が載り、この年は多くの随筆を書く。三十六年は作品がない。

明治三十五年、夫の貞次郎が病氣療養となり、三十六年から三十七年にかけて三年、鎌倉（長谷）での転地療養が続いた。その間、

流産をし、夫の弟の精一（一高生）が死去した。女性として生まれたがゆえの煩悶が続いた時期であった。

ここで、当時の女子教育について考えてみたい。眞有澄香『孝子・毒婦・烈女の力―近代日本の女子教育』（8）に拠ると、「教育令」（明治十二年）以来、男子の教育制度は確立されていく。しかし、明治三十二年の「高等女学校令」発令まで、女子教育は具体的に示されることはなかった。男女別学と、「教育令」第三条で、「女子ノ為ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ」とあるだけで、「教育令」から「高等女学校令」までの二〇年間は、いわば女子教育制度の空白期であり、無統制による自由で創造的な女子教育の発展期ともなった。」ということである。廣子が十歳から十七歳まで寮生活を送りながら学んだ、東洋英和女学校などのキリスト教系女学校の進出は、「明治維新によつて身分制度から解放された庶民たちの自由や平等獲得への強い意欲の表れをも垣間見ることができよう。」と述べてある。

〈わか草の若かりし世の物思ひいづれば胸もゆるかな〉は、夫の病が快復に向かいつつある頃であろうか。翌年の四月からは日本銀行調査役として勤務するまでになる。ようやく平穏な生活が始まり、東洋英和で学んだ若き頃の「胸もゆる」思いが、再び心を燃やすのである。

『あけぼの』の歌

『あけぼの』明治三十九（一九〇六）年六月、修文館発行。佐佐木信綱選、竹柏会の合同歌集。川田順、石樽千亦等十二名、全歌数七〇九首。片山廣子の短歌「朝月夜」一〇〇首掲載の中より抄出する。

未知らぬ野みち山みちいづれにか神のめすらむ方に行かばや
うち眠るわが子の寝顔ながめつ、命を惜しと思ひそめぬる
幼子の人となるまで願はくは此子の親にいのちあらせよ
わがせこがやまひを得つる牛込の矢来の里はうきところかも
みとせ我かり住居せし長谷寺のみ山のかげの草の家おもふ

初めの二首は『心の花』明治三十七年五月、「野みち山みち」七首の中にあり、「読売新聞」五月八日にも載せられている。自分の意志ではどうしようもない、病の夫を介護する生活に、先は見えないけれど最善を尽くすしかないという、廣子の真摯な姿が感じられる。長男の達吉はまだあどけない四歳児。その寝顔に、母親として「命を惜し」と思い初めたという。「惜し」は「愛し」でもある。この子が一人前になるまでは、「此の子の親にいのちあらせよ」と祈る。恵まれた環境で西洋的な自由な教育を受けてきた廣子だが、今は自分のことは考えまい、ひたすらに目の前の「いのち」を守ろうとする日々であった。

三十九年五月の『心の花』では、「矢来の里はうきところ」と言

い、「長谷寺」の山かげの陰気だった「草の家」を回想できるまでに落ち着いた生活となったのだ。

あやしくもこひしかりけりさきの世は神のゆるし、いもせなり
けむ
忘れむと思ふに消ゆる思ひかはいきの限は君をおもはむ
のちの世は蝶ともならむ塵ともあれ物おもふ人と又はうまれじ
わがむねの奥に小さき宮たて、君を神としひそかにまつる

『あけぼの』には、情熱の迸る恋歌も含まれる。先の合同歌集『竹柏園集第一編』に詠んだ「おさへてもそゞろにうごく心」が、恋として表現されたのが三十七年五月『心の花』の「あやしくも」「忘れむと」の歌。翌月号に「のちの世は」とともに、「わか草の若かりし世の物思ひいづれば胸もゆるかな」を発表している。「胸もゆる」思いを、三十九年五月『心の花』では、「君を神としひそかにまつる」と、自ら収めようとしている。

世にふれどあるかひもなし人の親の女を生むは罪にあらずや
髪たちて男さびして酒のみてわがおもふ事はむとぞ思ふ

女ながらも生まれたからには、何事かを為そうとの望みを持つ廣子であったのだろう。廣子に時代の方が追いついていなかった。「あ

るかひもなし」「女を生むは罪」とまで言い、「髪たちて男さびして酒のみ」「おもふ事」を言えたらどんなによからうと諧謔を弄する。

三十九年二月、大森新井宿に転居する。『あけぼの』に百首の歌が載ったのは、信綱の、『心の花』を代表する歌人としての期待と共に、廣子の若き頃からの「胸もゆる」思いが、生活の苦勞を越え、人間味として作品に反映するようになったからではないだろうか。

『心の花』八月号に、「『あけぼの』を読む」（松本信夫）が掲載される。「片山女史の歌は調想と相叶つた渾然たる美しき芸術品である。」とある。『心の花』では、「歌集あけぼのにつきて」（一）を八月号（第十卷第八号八月一日発行）に、（二）を九月号（第十卷第九号九月一日発行）に載せ、新聞・雑誌の『あけぼの』の歌集評を紹介している。（二）の『あけぼの』と廣子に關した歌評に注目したい。現物確認できるものは記載（＊印）し、他は転載した。

『国民新聞』「竹柏園社中の俊才が物した短歌、新体詩の優を抜き秀を蒐めたるものにして選者は現今歌界に其の人ありと知られたる佐々木信綱氏なり歌は穩健にして句調古ならず新ならず自ら一種の流派を為せり当今歌調殊更に古撲ならんとして却て魔道に墮つるもの少からず此の集の如きは此の墮落者を救うに足らんか」

『帝国文学』「片山廣子女史の「朝月夜」橘糸重女子の「にげ

ゆくかげ」など、夫々におもしろく」＊帝国文学会 明治三十九年八月 104頁

『明星』「巾幗の作家には却て男性の諸氏より勝れたるものあり。片山廣子氏に二十二首。わが世いかで末おだやかに楽しかれ夕日の空にとぶ鳥のごと」「取り出でて新しき所を見えねど、その感情を詩調も、確に一步歌の境地に入れり。（與謝野氏）」

＊新詩社 明治三十九年八月 80・81頁

『国民新聞』の「殊更に古撲ならんとして却て魔道に墮つるもの少からず」は、『明星』等の新派和歌や自然主義の風潮を暗に指していると思われる。廣子は自らの内面世界を、「狂熱と理智の濃き陰影」（『翡翠』）であると言った。「狂熱」の面ではやや露骨となり、「あやしくも」「忘れむと」の情熱の迸る恋歌となる。これが却って古めかしく、清新さが感じられない。一方、病の夫を介護し子を思う生活の中で詠まれた「うち眠る」「幼子の」の歌は抑制が効き、「その感情を詩調も、確に一步歌の境地に入れり」（『明星』）の評となったのであろう。平易な言葉で、共感できる歌となっている。「理智」が影を落とすのが「世にふれど」「髪たちて」の歌。晶子に（かかる時をのこなりせば慰むるわざの一つに雄詰をせん）（わが歌のかたはしをだにかの長者その宰相は知らずやあるらん）（灰色の日）『新聲』第二十卷第十号）（9）の明治四十二年十一月の歌があるが、廣子が晶子に先んじてこのようなシニカルな歌を詠んでいる

ことが新しく面白い。

「玉琴」の歌

『玉琴』明治四十一年（一九〇八）年四月、春陽堂発行。佐佐木信綱選、竹柏会の第二合同歌集。同人十四名、全歌数七九三首。片山廣子の短歌「きみ」一〇〇首掲載の中から抄出する。

人見ればおもてぞあかむよべの夢に君をしこふと泣きてつげしを

心ありときく思ふな世の中は鸚鵡語りて小猿も舞ふよ
おもねらずはゞからずして世に立たむ父の心はわが命ぞも
波けぶる鮫津の里の村雨に肩ぬらし行くわかきごぜかな

明治三十九年九月から四十一年一月の『心の花』の中から、『玉琴』に掲載されている。「きみ」の題を持ち、囚われる思いの一つは、「人見れば」の歌のように恋である。人妻の廣子が、歌で大胆な告白をしているように見えるが、実際は「恋」の題詠のように詠んでいたらしい。知人に、「短歌では何でも表現できるから」と言ったという。創作ではないにしても、思いを高めることで日常を離れ、歌よみとしての自分を鼓舞していると考えられないであろうか。

「鸚鵡語りて小猿も舞ふよ」には、世の中からの疎外感を感じさせられる。竹柏会の人々、師の信綱、歌壇へも近づかなかったという。「鸚鵡」は言葉を繰り返し、へつらう人間の譬えであり、「猿」

は悪賢いお調子者を連想させるのだ。冷静に距離をとろうとしている。

明治三十八年五月、父吉田二郎が六十四歳で死去。「おもねらずはゞからずして世に立」った父を廣子は心から尊敬し、「父の心」を引き継ぐとする。イギリス総領事を務め、外交官として多忙だった父の晩年の様子を、〈世を捨てつ世に忘れし父君の御墓かざらん白百合の花〉『あけぼの』と詠う。廣子には、生来抱えている虚無感があると考えられる。

〈波けぶる鮫津の里の村雨に肩ぬらし行くわかきごぜかな〉の歌は、川田順が『短歌研究』（昭和三十二年五月）（10）に「理知と狂熱、片山廣子さんのこと」と題して書いている。「歌壇のいやなところ、文壇のいやなところを知りぬいて遠ざかったのかもしれない。それも〈かもしれない〉で本当のことはわからない。佐佐木先生へも近寄らなかつた。それもなぜだか判明しない。どうも底の知れぬ婦人であつた。」更に、「波けぶる鮫津の里のむらさめに肩ぬらしゆく若き瞽女かな」の廣子の歌を褒めると、「人間は結局この瞽女のやうなものです」と応えたという。廣子の冷静な姿が見えてくる。

ともすれば狂ひやすしよ我心母と呼ばるゝ身にふさはずも
かきいだく我が児のいきに温まり生きかへりぬるわが心かな
老いにけり何の樂しび二人たゞ此子の親といふのみにして
朝風に幼な友どちたき火して病みて来ぬ子の噂するかな

竹やぶの竹の葉さやぐ音もなくうぐひす眠るおぼろ夜の月

前の三首は子供を詠む。明治四十年八月、二十九歳となった廣子は、長女総子を出産した。夫の病気の看病のため、三年ほどを鎌倉の転地療養のために過ごし、その間に流産を経験した。七年を経て新たな命の誕生はどんなにか喜ばしいことであつたろう。しかし、「我が児のいき」の命の息吹に母親としての充実感を覚えつつ、母と呼ばれ「此子の親といふのみ」の人生かと、自己実現にほど遠い日々焦りが募つてゆく。

後の二首の「病みて来ぬ子の噂するかな」「うぐひす眠るおぼろ夜の月」には、物語性という共通項がないだろうか。廣子は恋や夢や愛憎の「われ」の思いを、露骨に表現することを控えてゆき、空想的な創作のベールに包み込むような表現に変化してゆく。何故そうしたのか。一つには、『いさゝ川』第六号（明治三十年六月二十八日発行）に吉田廣子の名で書いた「昔物がたり」の月かげにうたう鳥が廣子自身であつたこと。日の神に憧れながらも、他を押しのけてまで出て行くとはしない性分である。二つめに、夫の片山貞次郎が先に大蔵省に勤務し、その後は日本銀行調査役となる立場であつたことがあるのではないだろうか。近代短歌は「われ」を詠む一人称の文芸である。題詠の旧派和歌の時代ではない。そして、このような詠みぶりが廣子の新しい歌の衣として、四十二年一月号『心の花』の歌から、第一歌集『翡翠』に掲載される歌となつてゆ

く。

『心の花』明治四十一年五月号（第十二巻第五号）では、「歌集玉琴批評集」として、新聞・雑誌の『玉琴』の歌集評を紹介している。

『東京朝日新聞』四月二十五日掲載の『玉琴』評。「片山女史の佳調多きは集中異彩を放てり 君が涙拭ひまつりて人の世に生れし榮を悟りぬるかな／碎け散る磯の白波いさぎよや力籠れる短かき命／疑はぬ人の心に報ゆべく捨てばや胸の奥のかくれが／二面世の偽に馴れぬれど吾子には恥づる折もこそあれ／等冒頭より悉く真に女性の心の叫びならざるなし或は技工に乏しいといはん吾人は其偽なきを尊ぶ

「朝場重三氏の書状」（四月二十四日）「片山女史の（かきいたく我が児のいきにあたゝまり生きかへりぬる我心かな）はいひしらぬ情味あり又（御僧等ひろらの庫裏に夕げしぬ蛸なきて山くる、時）はさきの『あけぼの』の同女史が作（南より北ふきとほす大寺のひろ間ひらきて書を読むかな）と双幅一陣の涼風の下より生ずるを覚え候。」

『東京朝日新聞』は「真に女性の心の叫び」と捉え、「技工に乏しい」点も偽りなき歌の良さと高評価する。「朝場重三氏の書状」では、子を詠う歌の情味の豊かさを指摘し、（御僧等ひろらの庫裏に）の歌を、先の『あけぼの』の（南より北ふきとほす大寺の）と並べ、

その抒情性の高さを解説した。廣子が多様な表現の歌を詠み、模索していることが分かってくる。『心の花』六月号（第十二卷第六号）では、「歌集玉琴批評集（二）」が続く。

『萬朝報』「竹柏園秀才の歌集なり男子側よりは女子側振い就中片山廣子の作群を抜けり（暇あらば物食て眠れながらへて此世物憂き賢き人等）（女なほ心は廣しわが夫と夫の黄金と合せてめづる）など小気味よからずや」

『東亜新報』（義郎氏）「竹柏園主人の指導のもとに「あけぼの会」といふ短歌の研究が先年より組織せられて居て、（略）大塚、片山の両女史なども研究をこの会に積まれてる。（略）君去りてうつろとなりし胸なれば人たぶらかす魔も住みぬらん／うぐひすよわが歌持ちて遠く去れ人待つ宿の春のくれがた／片山女史の作の内である。」

『帝国文学』「片山廣子の（君が涙ぬぐひまつりて人の世に生れしはえを悟りぬるかな）（略）とにかくこの一集は徒らに又殊更に奇を求めないで自然の新境をさぐるといふ努力の声を収めて居るのである。韻文に興味ある人の一読に価する。（橄欖子）」

*帝国文学会 明治四十一年五月 139頁

『萬朝報』では、（女なほ心は廣しわが夫と夫の黄金と合せてめづ

る）を、小気味よしとする。『東亜新報』は、「狂熱」の歌を、『帝国文学』では「理智」の歌を佳作という。多彩であるゆえに、片山廣子の短歌というものの評価が、未だ定着していないことになる。

『心の花』七月号、八月号、九月号では、「『玉琴』をよむ」を近藤昌後が連載する。九月号（第十二卷第九号）にて、片山廣子の歌三十七首を採り上げている。

きみ 近藤昌後 片山廣子氏

君が涙ぬぐひまつりて人の世に生れしはえを悟りぬるかな
恋を写して露骨ならず。女らしき歌。佳作。

君去りてうつろとなりし胸なれば人たぶらかす魔も住みぬらん

この歌を、橘さんの。

必死にてうつろとなりしわが身なり今更何の音をかたつべき
の歌と対照すると、お二人の異った点も見えて、非常に趣味がある。

ともすれば狂ひやすしよ我心母と呼べる、身にふさはずも
大理石像にも熱血迸る。

かすかなる望よ消ゆな雨雲のおほふそなたに日は照るらしも
佳作。

女猶心はひろしわが夫と夫の黄金と合はせてめづる

ここに至つて凡手の作にあらず、敬服。

うたゝねに夢うつゝなきますらをの髯ぬきて見む力おつやと
諷刺でなくて、滑稽の感がする。

別れては死なむの歎き程ふれば眠りて食ひて肥えはてしはや
寸鉄人を殺す。

罪やなにわれはをみなぞ道知らず君さそはすかもゆる火中に
情火人をやく。

狂ひあそぶうなるのわれに母上は涙ぼくろをとれと仰せし
女ならてはとうなづかれる。

並べることで、まさに、狂熱もあれば理智もあるという詠いぶりが際立つ。へかすかなる望よ消ゆな雨雲のおほそなたに日は照るらしもへ狂ひあそぶうなるのわれに母上は涙ぼくろをとれと仰せしへの内面を詠む歌に、深みと独自性が出てきていると感じられる。

つかれたる人の一群いそぎけり小石川橋夕ぐれの雨

小石川橋とあるので、砲兵工廠の門を出でくるつかれた職工のさまも見えるし、蕭條たる夕ぐれの雨もよく調和するのである。人見ればおもてぞ赤むよべの夢に君をし恋ふと泣きて告げしを

今少し婉曲にありたかりし。

世の旅の寒く寂しき日もあらばもゆる炎の我をおもはせ

また君が得意の境。

行くれのなだらかなるに飽きはてぬあたり砕けむ岩もあなと
さそふ水あらばといのる身の秋に更に恋しき人もなきかな
誰れかとふ世の大海のたゞ中に千浪あとなく沈みはてなば
世に拗ねたる人の面影が見える。

朝空と澄みたる心たちまちに黒雲わきぬ身をおもふ時

佳作。

敢て多くをいはず、君の如きは、女流作家として、明治の短歌に特筆せらるべき一人であらう。

へつかれたる人の一群いそぎけり小石川橋夕ぐれの雨へは、社会の底辺で労働に従事する人々へ眼差しが注がれている。廣子の蔵書には、石川啄木の歌集やパールバックの『大地』等も含まれており、労働者階級への関心は後に、戦中戦後の生活に困窮する人々の姿を詠もうとした姿勢に続いていくと考えられる。かと思えば、へ人見ればへからへ誰かとふへの、「今少し婉曲にありたかりし」と書かれたような情熱迸る歌がある。へ朝空と澄みたる心たちまちに黒雲わきぬ身をおもふ時へは、湧き来る思いが実感をもって伝わり、廣子は狂熱をどう表現するべきか、模索していたのではないだろうか。これらの寸評は、「大理石像にも熱血迸る」「また君が得意の境」など、廣子の歌を常より見てきた同人ならではの、人と歌風を理解した上でのものとなっている。『心の花』を代表する「女流作家と

して、明治の短歌に特筆せらるべき一人」とまで言わしめた歌人の、第一歌集『翡翠』（大正五年）が高い評価を得られなかったのは何故であろうか。

『あけぼの』（明治三十九年）、『玉琴』（明治四十一年）の初期の歌二百首を載せなかったことが大きいと考える。『翡翠』の序文の信綱の言葉にもあったように、「竹柏会」の合同歌集『あけぼの』『玉琴』の初期の歌をも載せることで、廣子のシニカルで小気味よい清新な歌柄は、読む人の共感を得て、更に高く評価されたのではないだろうか。

おわりに

廣子は第一歌集『翡翠』には明治四十一年までの短歌は入れることなく、主に明治四十二年からの『心の花』のものを選んで載せている。その間、生活面での苦勞の数々があった。病気の夫の介護のため、三年ほど鎌倉長谷での転地療養をしている。そして、子育てとともに長男の嫁として、夫の弟妹の世話があった。長女であり、実家への心配りもよくした。また、身内や親しくしていた人々との死別が重なった。廣子自身も病に苦しむ。明治四十一年は、尊敬していた兄嫁が若くして先立ち、鬱の状態になったという。ここまで歌の特色は、「われ」を詠む、嘆きの歌や恋歌であり、何かに囚われた思いが強い。

佐佐木幸綱は『野に住みて』（月曜社）解説（6）に、「『あけぼ

の』『玉川集』『玉琴』の時代の廣子は、「心の花」では有望な女性歌人として注目されつつも、まだ習作期だったと見ていい。さまざまな要素を抱き込みながらそれらがまだ並列的に混在していて、片山廣子らしさはみられないのである。」と記している。

多様な題材と表現が混在しているが、後に『翡翠』を経て『野に住みて』に結実する、平易な詞と身近な素材で共感を得る、片山廣子の歌の世界の出発点がここにあると考える。狂熱と理智、そして情愛と諧謔が錯綜する内面世界を詠んだ、『あけぼの』『玉琴』の初期の歌が欠けたことで、『翡翠』の感性和知性が読者にとって近づきがたく、「われ」を詠む清新な歌集として読まれなかったことが惜しまれる。

四十二年からは、写実的な歌とともに、比喩的、空想的な歌を多く詠むようになる。囚われることを嫌い、苦しみ、自己の切実な部分としっかり向き合う姿勢で歌を詠む。そこから片山廣子という歌人の個性が際立ってくる。真実を求めようとするが、現実の中では、時代と立場に束縛されて得ることができなかった。そこで、魂の自由を求め、比喩的空想とも言うべき独自の世界を生み、これがアイランド文学の翻訳へと繋がっていったのではないだろうか。幻想文学と受け止められがちなアイランド文学は、虐げられた民族の思想でもある。現実をしっかりと、より深く見ようとする視点が、創作のメカニズムを通して空想の世界を形作ったといえる。空想は、廣子にとって、真摯に自己と向き合うことではなかったか。現実か

らの逃避ではなく、現実の自己を明確に照らし出すために、比喩的空想の方向へ向かったと言える。夏目漱石が鬱に苦しみ、「吾輩は猫である」の執筆を始めたことに近い心境だったかもしれない。『翡翠』の歌風は、旧派和歌の美しい詩歌の境からも、囚われる「われ」からも離れ、「狂熱と理智の濃き陰影を印して居る」「最も強く自分を現はしたもので、自分の身の半身の如く」あることを目標に、「われ」の歌を模索することで確立していったと言えよう。

〈いとまあれば物食ひて眠れながらへて此世物うきかしこき人ら〉と詠む初期の『玉琴』の歌に比べ、〈はたらきて水のみて飯を頂きし昔びとの夢も小さくありけむ〉の、第二歌集『野に住みて』の晩年の歌は、実に軽やかに詠まれている。しかし、読む人の共感を得る、シニカルで小気味よい清新な歌柄の水脈は繋がっている。『翡翠』から『野に住みて』へ、清新さに繋がる、「われ」をうたう歌風の確立過程を明らかにすることで、近代短歌の流れの中での片山廣子を位置付けるため、更に研究を進めてゆきたい。

(注)

- (1) 佐佐木信綱 序文『翡翠』 秋谷美保子『片山廣子全歌集』(現代短歌社 二〇一二年四月) 12頁(『翡翠』竹柏會出版部 一九一六年三月)
- (2) 佐佐木信綱『佐佐木信綱 作歌八十二年』(日本図書センター 一九九九年十二月) 4647頁
- (3) 田中薫「無名氏」作として発表した信綱の新体詩『佐佐木信綱

研究』第四号(佐佐木信綱研究会二〇一五年六月) 146147頁

- (4) 佐佐木信綱 新体詩「玉くしげ」『新聲』第二卷第六号(新聲社 一八九七年六月) 224225頁(『新聲』復刻版 ゆまに書房 一九八三年)

- (5) 山田吉郎『明治短歌の河畔にて』(短歌研究社 二〇一四年五月) 43頁

- (6) 佐佐木信綱「片山廣子」『明治大正昭和の人々』(新樹社 一九六一年三月)

(片山廣子 松村みね子『野に住みて』短歌集+資料編 月曜社 二〇〇六年四月) 574頁

- (7) 佐佐木幸綱 解説「片山廣子の「境地」」『野に住みて』(片山廣子 松村みね子『野に住みて』

短歌集+資料編 月曜社 二〇〇六年四月) 646・647頁・652頁

- (8) 眞有澄香『孝子・毒婦・烈女の力―近代日本の女子教育』(双文社 出版 二〇一四年二月) 1213頁

- (9) 与謝野晶子「灰色の日」『新聲』第二十卷第十号(新聲社 一九〇九年十一月) 66・68頁

- (10) 川田順「理知と狂熱 片山廣子さんのこと」『短歌研究』第十四巻 第五号(日本短歌社 一九五七年五月) 112・113頁

(参考資料・文献)

- 『いさゝ川』 第一号 明治二九年十月五日 竹柏社発行
 『いさゝ川』 第二号 明治二九年十一月三十日発行
 『いさゝ川』 第三号 明治三十年三月十八日発行
 『いさゝ川』 第四号 明治三十年四月十二日発行

- 『いさゝ川』第五号 明治三十年五月二十六日発行
『いさゝ川』第六号 明治三十年六月二十八日発行
『いさゝ川』第七号（最終刊）明治三十一年一月十一日発行
『心の花』明治三十一年二月～昭和四十一年一月 竹柏會出版部発行
（『心の花』復刻版 佐佐木幸綱監修 教育出版センター 一九八〇年）
秋谷美保子『片山廣子全歌集』（現代短歌社 二〇二二年四月）
片山廣子 松村みね子『燈火節』随筆＋小説集（月曜社 二〇〇四年十一月）
片山廣子 松村みね子『野に住みて』短歌集＋資料編（月曜社 二〇〇六年四月）
片山廣子『燈火節』（暮しの手帖社 一九五三年六月）
藤田福夫「増補片山廣子年譜と明治大正期作品抄」（金沢大学語学文学研究 一九七五年十月）

The Tanka of Hiroko Katayama, from “Isasagawa” to “Kokoro no Hana” : A Look at the Formation of a Maiden Poetic Style

SHIMIZU, Mariko

(Summary)

In her first collection of poems, "Kawasemi," Hiroko Katayama did not include her poems appearing before 1908 in such publications as "Isasagawa" and "Kokoro no Hana." Her poems up to that time, evoking sorrow or about love, reflected her ever being captivated by something.

From 1909 up to the publication of "Kawasemi" in 1916, she composed mostly descriptive poetry as well as metaphorical and fanciful works. Interestingly, such preferences may have drawn her toward translating Irish literature. The poetic style in the intently introspective "Kawasemi" collection is distinguished by crossing the boundary of esthetic poetry, going beyond self-absorption, and casting about in her unique inner world.

This paper deals with the times preceding "Kawasemi," bearing witness to formation of her maiden poetic style.

Key words: Hiroko Katayama, Nobutsuna Sasaki, Tanka, "Isasagawa," "Kokoro no Hana," self